編集後記

『ヴィクトリア朝文化研究』第19号をお届けします。

前年からのコロナ禍が一向に終息の気配を見せない中で半ば強行された東京オリンピック・パラリンピック。その熱も冷めないうちに起こった政変と、それに続く国政選挙。様々なものに翻弄され続けた2021年でした。空疎な掛け声や右顧左眄する政策に対する国民の苛立ちや、ワクチン接種を後回しにされた人々の不安など知らぬかのように、自らの権勢や利益のために自己中心的で矛盾した言動を繰り返す政治家の姿を見て考えたのは、ヴィクトリア朝社会の病理を「怒り」ではなく「笑い」で攻撃したディケンズが現代に生きていたら、どんな作品を書いただろうかということでした。

彼のエッセイの表題(『ボズのスケッチ集』、『アメリカ覚え書』、『イタリアからの絵』)に見られるように、ディケンズは実際に見たもの、あるいは心の目に映ったものを再現することに対する強い自負があったように思います。M・H・エイブラムズの『鏡とランプ』(1953)が説くように、ロマン派以降の作家だった彼は、単に芸術を現実の模倣(ミメーシス)として捉える態度(「文学は時代を映す鏡である」)に飽き足らず、自身が見てみたいと思う世界の姿を追求し、作品に描こうとしました。

「かがみ」という言葉には「鏡」という文字以外に「鑑=お手本」という文字が当てはまります(例:武士の鑑)。現実を映し出しつつも、世界とは本来こうであるべきなのだという彼なりの理想は、決して声高に語られることはなく、市井の人々の姿に投影されています。諧謔と悲哀がないまぜになったそれは、読者の共感を呼ぶと共に社会の現状に対する疑念を喚起し、結果的に社会改良につながりました。晩年の陰鬱な作風は、彼自身の健康状態の悪化もさることながら、理想とする社会の姿が心に浮かばなくなってしまったからです。今の日本社会の閉塞感も、理想とする社会を誰も描けなくなっており、惰性的にしか日々をやり過ごせなくなっているからかもしれません。後期に差し掛かったヴィクトリア朝社会にどのような不安や焦燥が渦巻いていたのかを考え直す契機になりました。

本年も7本の投稿論文から2本を採用できたことは幸いでした。2年間

の編集委員長の任を終えるにあたり、今号に投稿して下さった全ての執筆者、充実した書評をお寄せ下さった書評者、編集作業のサポートをして下さった学会事務局の方々ならびに各編集委員の先生方に深く感謝いたします。どうもありがとうございました。

（金山亮太）